

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：34525

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380817

研究課題名(和文) 障害者へのスティグマティゼーション是正プログラムの開発に関する研究

研究課題名(英文) A Research on development of program to correct stigmatization for people with disabilities.

研究代表者

米倉 裕希子 (YONEKURA, YUKIKO)

関西福祉大学・教育学部・准教授

研究者番号：80412112

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は知的障害者のスティグマに関する海外や国内の文献及び知的障害福祉に従事する職員対象の大規模調査を基に、スティグマティゼーション是正のため肯定的態度や共感性を高めるプログラムを作成した。文献から知識と情緒的教材に加えディスカッションすることが肯定的態度の要因になることがわかった。また大規模調査では資格の有無、統合教育の経験、研修の受講が影響することが明らかになった。そこで「知識・情報」「対処方法」「サポート」を柱としたプログラムを実施し、前後及び未実施群と比較した。研修の効果は明らかではなかったが、肯定的態度や共感性は上昇し3か月後も低下しなかった。学校教育や職員研修での活用が期待できる。

研究成果の概要(英文)：In this research, we invented and evaluated a program to correct stigmatization of staff engaged in welfare for people with intellectual disability (ID). First, we reviewed some previous researches. Those showed that "knowledge", "emotional materials" and "discussion" affect positive attitudes for ID. Secondly, we surveyed positive attitudes and empathy of about a thousand staffs engaged in welfare for people with ID. In the cross-sectional study, it became clear that existence of qualification, experience of integrated education, attendance of training affected their attitudes. Finally, we practiced an intervention program based on "knowledge", "coping" and "support" and evaluated that. However, the effectiveness of it was not clear statistically, but the positive attitude and empathy increased and didn't decline after 3 months. We improve the program and expect to use it for school education and staff training of various industries.

研究分野：社会福祉

キーワード：障害者福祉 知的障害 態度 福祉従事者 スティグマ スティグマティゼーション

## 1. 研究開始当初の背景

スティグマ (stigma) は、古代ギリシャにおいて奴隷、犯罪者、謀反人であることを刻印したことから始まり、今日では対象となる人に対するネガティブな認識や態度を指すようになった。社会福祉分野では、マイノリティ集団が他者によって与えられる、あるいは障害者自身が持たされている不名誉なものを意味し、一般市民がスティグマを与える場合や押し付ける場合は、スティグマティゼーション (stigmatization) という。スティグマは、知識 (無知) や態度 (偏見)、行動 (差別) の3つのレベルで構成される概念である<sup>1)</sup>。精神障害者に対する偏見やスティグマは世界中でみられる現象であり、スティグマあるいはスティグマティゼーションが、自尊感情の低下、社会参加の制限、社会的ネットワークの減少、失業や住宅問題、収入の不平等などの深刻な社会的排除と関連していることから<sup>2)</sup>、社会のスティグマを改善するための活動をアンチスティグマ活動と呼び、国際的な活動へと発展してきている。

2013年に障害者差別解消法が成立し、合理的配慮の提供、障害者の差別防止の啓発が求められるようになった。2014年1月には障害者権利条約に批准し、今後ますます差別撤廃に向けた取り組みが求められている。差別はスティグマの問題でもあり、スティグマティゼーション是正のプログラムは差別を解消し、合理的配慮の理解を求める上で重要なプログラムと考えられる。

最近では、精神障害者から発展し知的障害者のスティグマについても関心が高まっているようになってきており、知的障害者のスティグマやスティグマティゼーションに関する研究も増加してきているが、国内においては知的障害者のスティグマやスティグマティゼーションに関する研究は少ない。そのため、知的障害に関するスティグマやスティグマティゼーション是正に関する研究が必要である。

## 2. 研究の目的

以上のような背景から本研究における目的は以下の4点である。

### (1) スティグマ及びスティグマティゼーションに関する国内外の文献レビュー

国際的な課題また国内の現状を明らかにするため、国内外の文献をレビューする。特に国内については、系統だったレビューはない。知的障害者の態度研究の動向について系統だった手法によるレビューを行う。

### (2) 知的障害者本人のスティグマを評価する尺度開発

スティグマティゼーション是正プログラムおよびアウトカムのため、Aliら<sup>3)</sup>の知的障害者本人が知覚するスティグマを評価する尺度 (Measure of perceived stigma in

people with intellectual disability, 以下スティグマ尺度) の日本語版の検証を行うとともにスティグマの現状を明らかにし、関連する要因を検討する。

### (3) 福祉従事者の横断研究

スティグマは一般社会の中だけではなく、当事者自身にも、また当事者を取り巻く家族、精神医療福祉関係者、一般の医療者、保健関係者、行政関係者など立場の違う多くの人たちの中にも存在しているため、様々な立場から検討が必要である<sup>4)</sup>。

知的障害者のライフコースにおいて、サービスの充実とともに福祉従事者との接触機会及び時間は増加する。人材確保が急務の課題である福祉現場において、福祉従事者の質の確保も課題となっているため、非正規職員も含めた多様な福祉従事者を対象に調査を行う。

### (4) スティグマティゼーション是正プログラムの実践と効果測定

横断研究の結果、知的障害者施設に従事する職員においても、22%が知的障害に関する研修を受けたことが「ない」と答えており、同様に発達障害についてはさらに多い31%が研修を受けたことがないと回答していることがわかった。さらに、重度や行動上の困難が伴う場合、利用を拒否するのは仕方がないに「そう思う」と答えた人が60%いた。そのため、福祉従事者へのスティグマティゼーション是正プログラムを実施し、その効果測定を行う。

## 3. 研究の方法

2. 研究の目的 (1) ~ (4) にそって研究の方法を述べる。

### (1) 文献レビュー

海外の文献はデータベース Pubmed を用い、「intellectual disability」および「stigma」をキーワードとし、2014年12月までの研究を対象とした。また、国内の文献はデータベース CiNii を用いて障害および態度をキーワードにして得られた2015年3月までの研究を対象とした。

### (2) 知的障害者本人のスティグマ尺度

研究協力者は、知的障害者の親の会を通して依頼した各地区の当事者の会あるいは親の会が運営する福祉サービス事業所の利用者である。調査期間は2015年2月~6月である。尺度の再テスト信頼性を検証するため、協力者のうち30名には、約2週間後に同様の調査を依頼し実施した。調査項目は、基本属性、スティグマ、自尊感情の3つである。

スティグマ尺度は、原著者に翻訳の許可を得てから日本語に翻訳し、第三者によるバックトランスレーションを行った。バックトランスレーションを原著者に確認してもらっ

た後、若干の修正を行い、日本語版の完成に至った。Rosenberg 自尊感情尺度 (Rosenberg Self Esteem Scale, 以下 RSES)<sup>5)</sup> を妥当性の評価に用いた。

分析は、Stata(version 13)及び SPSS for windows (version 15) を使用した。

### (3) 福祉従事者の横断研究

A 県の知的障害者施設が任意で加入する団体に協力を得た。団体に加入している 219 施設のうち住所等を整理し、210 施設に依頼文を送付した。そのうち、協力の回答が得られた 108 施設の職員であった。最終的に、総数 2744 部の質問紙を発送した。

調査内容は、性別や年齢、雇用形態等の基本属性、知的障害者へのスティグマティゼーションの評価として、Jefferson scale of empathy (JSE) 及び知的障害者への肯定的態度の 2 つの尺度を用いた。JSE は、Hojat ら<sup>6)</sup> が患者に対する共感的態度の評価尺度として開発され、様々な国で翻訳されている。医療従事者用に日本語訳された質問紙を翻訳者の許可を得て福祉従事者に修正し使用した。また、岩井ら<sup>7)</sup> が作成した精神障害者に対する肯定的態度尺度を知的障害者に修正して使用した。

分析は、Stata(ver.13) 及び SPSS for windows (version 15) を用いた。

### (4) スティグマティゼーション是正プログラムの実践と効果測定

福祉従事者を対象に「知識・情報」「対処方法」「サポート」の 3 つで構成した 2 日間の介入プログラムを作成した。1 回目のプログラムの 1 週間後に 2 回目のプログラムが実施された (合計 11 時間)。プログラムは、講義、グループワーク、ロールプレイなどを取り入れた他、障害当事者を研修講師として招く他、障害者の保護者にインタビューを行い研修内容への参画を得た。

調査内容は、性別や年齢、雇用形態等の基本属性の他、知的障害者へのスティグマティゼーションの評価として、JSE 及び知的障害者への肯定的態度の 2 つの尺度を用いた。

対象者は 2018 年 12 月～2019 年 1 月にホームページ及び案内を関連施設に郵送し募集した「知的障害や発達障害を理解するための研修」に申し込んだ福祉従事者合計 70 名である。申込者 70 名は、希望により A 日程と B 日程の 2 つの日程に分け、A 日程を介入群 (35 名)、B 日程を比較群 (35 名) とした。介入群には介入の 1 か月前、介入 1 か月後で同じ質問紙を 2 回実施し、比較群は介入群と同期間を開け介入前に 2 回実施した。

主解析には、パネル分析及び AVOVA を実施した。全ての分析は Stata (ver.13) を用いた。

さらに、追試研究として同様のプログラムを実施し、介入後 3 か月後の効果についても検証した。

## 4. 研究成果

2. 研究の目的 (1)～(4) にそって研究成果及び考察を述べる。

### (1) 文献レビュー

海外の文献は、Pubmed データベースで検索された 82 研究のうち、関連のない研究を省いた 25 研究をレビューした。対象となった研究には、尺度に関する研究、横断研究、介入研究が含まれており、横断研究は知的障害者および家族のスティグマ、学生や市民からのスティグマティゼーションに関する研究だった。知的障害者の大半がスティグマを経験しており、家族を対象とした研究はアジアや中東などが中心だった。一般市民における大規模調査では vignette と障害の合致がスティグマと関連していることが指摘され、介入研究では間接的な接触でも態度の改善に貢献できる可能性が示された。今後は、より効果的な介入プログラムの開発とその効果測定が課題である。

国内の文献を内容別に整理すると、尺度開発に焦点を当てたものが 2 本、態度に焦点を当てた横断研究が 22 本、教育による態度変容に関するものが 8 本あった。横断研究では、小学生が 4 本、大学生が 15 本、福祉従事者が 2 本、知的障害者本人への影響が 1 本だった。態度変容については、小中学生が 3 本、大学生が 5 本だった。尺度は、内的整合性や構成概念妥当性は示されているが、妥当性と信頼性が十分検証された評価尺度が必要である。横断研究では、接触経験が好意的あるいは受容的態度に影響することは明らかだが、接触の質によっては否定的態度に結び付く可能性があり、態度変容には、単なる接触や知識の伝達に加えた工夫が必要である。一方で、態度が知的障害者本人に及ぼす影響や一般市民を対象にした研究は少なく、教育現場だけでなく態度の経年的変化を明らかにしていくことが期待されるだろう。

### (2) 知的障害者本人のスティグマ尺度

分析対象者は、101 名で、男性 69 名、女性 32 名だった。Cronbach 係数は、0.81 以上 (n=100) で、再検査信頼性の級内相関係数は、0.888 (n=22) だった。海外の先行研究よりもスティグマの知覚は少なく、スティグマと自尊感情、性別や年齢との関連はなかったが、特別支援学校群よりそうでない方がスティグマは大きかった。また、統計的な有意差は得られなかったが、障害が軽度になるほどスティグマの知覚が大きくなる傾向が見られた。

先行研究と比較しスティグマの知覚が少ない理由として社会との接触経験が少ないことが考えられた。本研究の課題は、尺度の信頼性については検証できたが、収束的妥当性以外の妥当性を示すことができていないことである。

しかしながら、国内ではまだ少ない知的障

害者のスティグマに焦点を当て、尺度を用いた量的調査を行った点で意義がある。

表1 スティグマ尺度の結果

	本研究	本研究	
		「はい」 (n)	Cronbach $\alpha$ (n=100)
1 (人々は) 私のことをみくだした態度で話す。	30 (100)	0.832	
2 私を怒らせるような言い方をする。	40 (100)	0.864	
3 恥ずかしい思いをさせられたことがある。	20 (100)	0.843	
4 みんなが私を笑う。	28 (101)	0.839	
5 みんなが変な目で私を見る。	26 (100)	0.842	
6 (人々は) 私の外見を笑う。	18 (100)	0.840	
7 (人々は) 私のことを子どものように扱う。	19 (101)	0.846	
8 私は、人が私のことを良く思っていないから、近づかないようにしている。	21 (100)	0.837	
9 (人々は) 私の話し方を笑う。	18 (101)	0.845	
10 (人々の) 私に対する行動について悩んでいる。	30 (101)	0.844	
合計の平均値	2.50 $\pm$ 2.84(100)	0.857	

表2 スティグマと RSES

n = 89 <sup>1</sup>	Mean (SD)	Median (IQR)
スティグマ尺度	2.51 (2.81)	1 (4)
Rosenberg 自尊感情尺度	27.17 (4.10)	26 (5)
Spearman correlation coefficient	-0.372	P < 0.003

### (3) 福祉従事者の横断研究

調査票の返送数は 1113 (回収率 40.6%) であり、分析対象者はそのうち 1112 名であった。対象者の性別 (n=1111) は、男性 40.8%、女性 58.6%、どちらでもない 0.27% だった。平均年齢 (n=1094) は 45.6 歳で、経験年数 (n=1105) は、「1 年~4 年」(27.8%) が最も多く、次いで「5 年~9 年」(22.8%) だった。雇用形態は正規が 57.3%、非正規 34.8% であった。福祉系及び隣接領域の教育機関の修了者 (n=1103) は 49.9% であり、関係資格を有している人 (n=1104) が 66.4% だった。知的障害者に関する研修の受講経験有は 74.6% だった。

JSE の合計得点の平均は 107.9  $\pm$  13.7 (n=969) だった。JSE では、年齢 (n=969, r=-0.045, p=0.164), 性別 (n=1013, t=0.664, p=0.507), 障害家族の有無 (n=965, t=-1.008, p=0.314) において有意な相関あるいは差はなかった。一方で、経験年数 (n=969, r=0.143, p<0.001), 雇用形態 (n=899, t=0.3754, p<0.001), 専門教育歴 (n=965, t=-5.259, p<0.001), 資格 (n=965, t=-7.052, p<0.001), 知的障害の研修 (n=923, t=-5.146, p<0.001),

発達障害の研修 (n=923, t=-5.054, p<0.001), インクルーシブ教育 (n=948, t=-4.180, p<0.001) の項目で、「有」とした者が「無」とした者より JSE の得点が有意に高かった。

肯定的態度の合計得点の平均は 52.6  $\pm$  7.8 (n=1015) だった。肯定的態度でも、年齢 (n=1005, r=-0.060, p=0.056), 経験年数 (n=1011, r=0.012, p=0.703), 雇用形態 (n=937, t=2.828, p=0.005), 性別 (n=1013, t=0.664, p=0.507), 障害家族の有無 (n=990, t=-1.375, p=0.169), において有意な相関あるいは差はなかった。一方で、専門教育歴 (n=1011, t=-4.563, p<0.001), 資格 (n=1012, t=-4.549, p<0.001), 研修 (n=957, t=-5.468, p<0.001) において有の方が無より有意に得点が高かった。また雇用形態においても正規職員の方における得点は、非正規より有意 (n=937, t=2.827, p=0.005) に高かった。JSE が年齢による相関はなく、経験年数による違いがあったのと対照的に、肯定的態度は年齢及び経験年数による違いは見られなかった。

重回帰分析の結果、JSE では、「雇用形態 (B=-2.07, 95% CIs [-3.83 to -0.31], p=0.020)」、「資格の有無 (B=5.09, 95% CIs [2.89 to 7.28], p<0.001)」、「インクルーシブ教育 (B=2.82, 95% CIs [0.91 to 4.73], p<0.001)」が、肯定的態度では「資格の有無 (B=1.95, 95% CIs [0.69 to 3.20], p<0.001)」、「知的障害の研修経験 (B=1.67, 95% CIs [0.23 to 3.12], p=0.020)」、「インクルーシブ教育経験 (B=1.29, 95% CIs [0.18 to 2.41], p=0.020)」が影響を与えていた。

図1 肯定的及び共感的態度に影響する要因

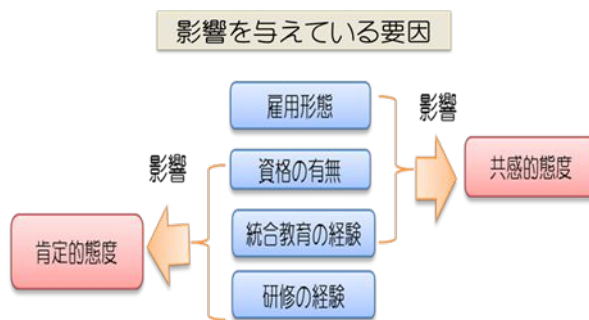


図2 知的障害に関する研修経験の有無

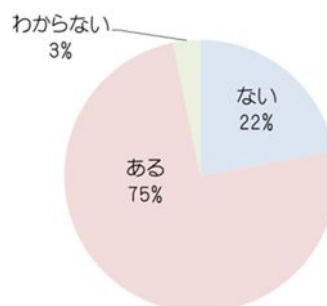
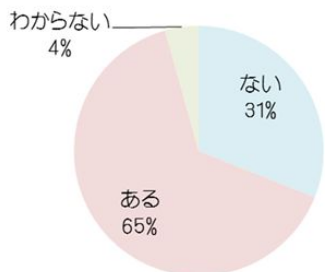


図3 発達障害に関する研究経験の有無



(4)スティグマティゼーション是正プログラムの実践と効果測定

2日間の研修に参加し、調査を実施できた対象者は介入群28名、対照群30名の合計58名で、男性14名、女性44名、平均年齢40.8±11.4歳、平均経験年数は6年9か月、主に日中活動に従事している人が66%だった。知的障害者や発達障害の研修未受講者が21名いた。JSEの平均得点は、介入群でプログラム前109.8±14.5、プログラム後112.8±14.0と上昇したが、対照群は1回目111.1±13.6、2回目110.7±10.9と減少した。また、肯定的態度の平均得点は、介入群においてプログラム前が56.1±4.7、プログラム後は58.6±6.6に対し、対照群でも54.6±7.6、2回目は56.6±9.2と上昇していた。しかし介入プログラムによる影響はなかった。本研究の介入プログラムは、参加者における知的障害者へのスティグマティゼーションの減少についての効果を示さなかった。しかしながら、介入群の共感的態度は上昇したことから、介入の継続や回数など修正することで効果が得られる可能性が示唆された。

図4 JSEの結果

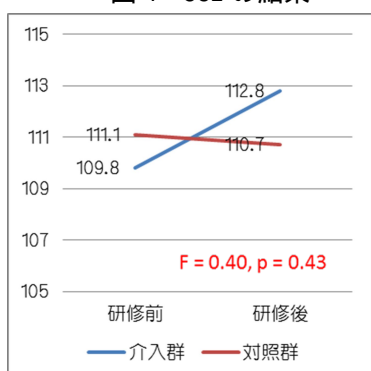
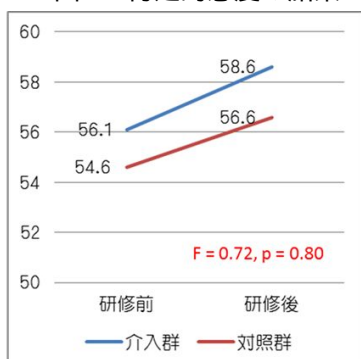


図5 肯定的態度の結果



また、対象者38名を対象に追試研究を実施した。JSEの平均得点は介入前105.9±2.4(N=35)で、肯定的態度では55.8±1.4(N=35)だった。肯定的態度では、統合教育の経験有が無より有意に高い得点だった。JSEは介入前109.8±3.8、介入後112.7±4.7(N=15)、肯定的態度は介入前58.2±2.1、介入後59.4±1.9(N=16)で、対応のあるt検定を行ったが統計的な差は得られなかった。追試研究の結果、前回同様共感性及び肯定的態度の平均値は上昇したが、統計的に有意な差は得られなかった。しかし、介入3か月後も共感性と肯定的態度ともに低下がみられなかった。

横断研究において、共感的態度に研修経験は影響しておらず、肯定的態度に統合教育の経験が影響していた。研修は共感性や肯定的態度の維持、継続に役立つが、福祉職に従事する前段階、学校教育において形成され、長期的に影響する可能性が示唆された。

今後は今回実施したプログラムを学校教育等で活用していくことを検討していく。

引用文献

- 1) 山口創生・木曾陽子・米倉裕希子ら(2013)「精神障害に関するスティグマの定義と構成概念：スティグマに関する研究の今後の課題」『社会問題研究』62, 53-66.
- 2) 山口創生・米倉裕希子・周防美智子ら(2011)「精神障害者に対するスティグマ是正への根拠：スティグマがもたらす悪影響に関する国際的な知見」『精神障害とリハビリテーション』15, 75-85.
- 3) Ali, A., Strydom, A., Hassiotis, A., et al. (2008) A measure of perceived stigma in people with intellectual disability. *British Journal of Psychiatry*, 193, 410-415.
- 4) 高橋清久・中西英一(2013)「総論：わが国におけるアンチスティグマ活動を中心に」『精神医学』55, 929-940.
- 5) 内田知宏・上埜高志(2010)「Rosenberg自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検証 - Mimura & Griffiths 訳の日本語版を用いて - 」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』58, 257 - 266.
- 6) Hojat M, Mangione S, Nasca TJ, et al. (2001) The Jefferson Scale of physician empathy: development and preliminary psychometric data. *Educational and Psychological Measurement* 61: 349-65.
- 7) 岩井和子, 野中猛.(2007) 精神科作業療法士の精神障害者に対する「肯定的態度」に影響を与える要因の検討. 日本社会精神

医学会誌, 15, 159-167.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

米倉裕希子, 山口創生. 日本語版知的障害者本人が経験するスティグマ評価の尺度開発 関西福祉大学研究紀要, 査読有, 21, 2018, 33-40.

米倉裕希子, 山口創生. 知的障害者のスティグマ研究の国際的な動向と課題: 文献レビュー. 社会福祉学, 査読有, 56(3), 2016, 26-36.

米倉裕希子. 知的障害者と態度に関する研究動向と今後の課題: 文献レビュー, 関西福祉大学発達教育学部紀要, 査読有, 1, 2015, 35-43.

<http://id.nii.ac.jp/1068/00000442/>

[学会発表](計4件)

米倉裕希子, 山口創生. 福祉従事者に対するスティグマティゼーション是正を目的とした研修の効果. 日本社会福祉学会第65回秋季大会(2017年10月21日~22日). 東京(首都大学東京南大沢キャンパス)

米倉裕希子, 山口創生. 施設職員における知的障害者に対する態度と関連する基本属性: 横断調査. 日本社会福祉学会第64回秋季大会(2016年9月10日~11日) 京都(佛教大学).

米倉裕希子, 山口創生. 知的障害者の態度研究に関する系統的レビュー研究. 日本社会福祉学会第63回秋季大会(2015年9月19日~20日) 福岡(久留米大学御井キャンパス) ポスター発表.

米倉裕希子, 山口創生. 知的障害者本人のスティグマに関する調査 - 嫌な経験の有無に関する対面調査の結果報告 -. 日本精神障害者リハビリテーション学会第23回高知大会(2015年)

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
取得年月日:  
国内外の別:

[その他]  
ホームページ等  
なし

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

米倉裕希子 (YONEKURA, Yukiko)

関西福祉大学・教育学部・准教授

研究者番号: 80412112

(2) 研究分担者

( )

研究者番号:

(3) 連携研究者

山口創生 (YAMAGUCHI, Sosei)

国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター・精神保健研究所・社会復帰研究部・研究員

研究者番号: 20611924